

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(三八地区) (第2回) 概要

日時：平成28年11月14日(月)

13:30～15:30

場所：アピル五戸 1階 白鳳の間

<出席者>

委員

伊藤 博章 委員、友田 博文 委員、高橋 正之 委員、宇藤 裕夫 委員、
山田 義雄 委員、川浪 孝雄 委員、橋本 芳弘 委員、石橋 伸之 委員、
中村 孝範 委員、吉岡 義久 委員、田村 哲章 委員、四戸 康雄 委員、
高橋 力也 委員、斗沢 一雄 委員(進行役)

オブザーバー

久慈 恵司 県立八戸高等学校長、 福井 武久 県立八戸東高等学校長、
竹浪 二三正 県立八戸北高等学校長、 鎌田 晃説 県立八戸西高等学校長、
三上 幾子 県立三戸高等学校長、 宍倉 慎次 県立五戸高等学校長、
四木 博之 県立名久井農業高等学校長、 米内山 裕 県立八戸水産高等学校長、
一戸 利則 県立八戸工業高等学校長、 敦賀 定彦 県立八戸商業高等学校長、
高谷 正 県立八戸中央高等学校長、 敦川 真樹 県立八戸第一養護学校長、
神林 宏喜 県立八戸第二養護学校長

1 開会

2 教育次長挨拶

平野教育次長から、挨拶があった。

3 事務局説明

(1) 第1回地区意見交換会及び意見等記入票における主な意見

(2) 第1回地区意見交換会において要望等があった県立高等学校のデータ及び他県等の参考事例

事務局から、資料1及び資料2について説明した。

(3) 第1回地区意見交換会での意見等を踏まえた学校配置シミュレーション

事務局から、資料3について説明した。

4 意見交換

委員から、次のような意見があった。

《三八意見1》

- 高校の教科は、例えば中学校のように社会科という科目ではなく地理や世界史、日本史等に細かく分かれ、理科も物理等に分かれており、教員免許は同一でも専門の教員が教えていると思う。現在、各教科の専門教員を配置するためには、何学級程度必要なのか、高校の校長に伺いたい。

進行役からオブザーバーに情報提供を求めた。

- 三戸高校は1学年2学級の学校である。本校では地理歴史・公民、理科の教員がそれぞれ2名となっている。現在本校に在籍している理科の教員は生物と化学が専門なので、物理は専門外の教員が指導している。地学は開講していない。専門科目の担当者をそろえるとすれば、理科については4名いないと全ての科目が開講できない。地理歴史・公民については、世界史と公民を専門とする教員がいるので、日本史と地理を開講した場合は専門外となる。理科と同様に少なくとも4名の教員が必要である。しかし、地理歴史・公民、理科の教員は専門外であっても、生徒の進路達成のため、日々教材研究に励み、授業の充実や受験対策に取り組んでいる。

何クラス必要かについては個々の学校の事情によるものとする。

- 八戸東高校は1学年6学級の高校である。理科4科目のうち、地学は開講していないが、それ以外の3科目については全て専門の教員が指導している。地理歴史・公民も同じく開講し、全て専門の教員が指導している。したがって、6学級あれば、専門の教員が指導し、大学入試にも対応できると思う。

しかし、例えばある科目を選択する生徒が10人程度であっても、当該科目を開講することにより開設科目数が増えると、その専門科目の教員の負担が増えるため、専門外の教員が指導することもあり得る。

必要な学級数については、4学級あれば最低限対応できる。6学級以上あれば大学入試にも十分対応できる。

- 基本方針において基本となる学校規模を4学級以上としているのは、それぞれの教科において必要な教員数を考えてのことと思う。

- 資料3の学校配置シミュレーションにおいて、三八地区では3つのシミュレーションが掲載されているが、五戸町としては（三八意見1）の全ての学校を残すということに賛成である。

前回の意見交換会でも五戸高校が通学等の面からは是非必要であるとの意見をいただき、正にそのとおりに思ったところである。

五戸町の地方創生を考えるに当たり、五戸高校の存在は大きい。五戸高校を存続させるために、五戸高校や五戸高校PTA等と協力しながら、例えば八戸市内

から五戸高校への通学が便利になるよう五戸町長に働きかけるなど、五戸高校の充実に向けて取り組んでいるところである。

かつて、五戸町に小学校、中学校は合わせて12校あったが、統合により現在は7校しかない。私も統合に携わったが、小学校、中学校は地域に根ざした学校であることから非常に厳しかった。

統合の際には、一方的に行政の視点で進めるのではなく、住民に統合しなければならぬという気持ちになっていただくことで成功した。具体的には、小規模校での複式学級の状況や運動会等の様子を見ていただき、多くの人数で教育を受けるべきだということで、統合についての理解をいただいた。

高校の統合に当たっては、統合はやむを得ないと理解してもらうことが必要と思う。

- 地域に根付いた高校は全て残すべきではないかと思う。階上町でも小学校の統合を行ってきたが、学校がなくなると地域が寂しくなる、あるいは、地域の活力がなくなるとの声を聞く。高校は地域にとっての心の拠り所である。

資料3の学校配置シミュレーションを見ると、機械的に考えているように思う。学校配置は地域全体で考えていかないといけない。果たして6学級にこだわる必要があるのか。先程科目数の話が出たが、教員の数を増やせば対応できるのではないか。教員定数の柔軟な運用やICTを活用した遠隔授業を積極的に活用することによって、授業の質を維持できると考える。

- 私が三戸高校に在学していた頃は6学級あった。入試倍率も1倍を超えており、当時の校長をはじめ、学校にも町にも勢いがあった。当時の三戸高校の入学式において、校長からは、郡部の学校であるが八戸市内の学校に負けないよう部活動も勉強も頑張らせたいとの挨拶があった。大学進学においても実績を残したほか、自転車競技等の部活動も活躍し、オリンピック選手を輩出した。

現在三戸高校は2学級規模だが、それでも入試倍率は1倍を割っている。定員割れが新聞等で報道されると、三戸高校がなくなるのではないかという噂が流れ、一層三戸高校の志望者が減る状況になる。また、最近は一戸市の高校を受検する生徒が増えてきているため、三戸高校を志望する生徒が減っている。したがって、私は地元の生徒に三戸高校を受検するよう勧めている。

学校配置については、小規模校でも残してもらいたい。現在、三戸町の小学校、中学校は合わせて5校しかない。以前は小学校、中学校が多く、地域の拠り所となっていた。しかし、現在は学校や働く場所もなく、地域が衰退していると感じる。

資料1の16ページに「行政は、人口増加の方策について考えるべきである」とあるように、子どもが現在少ないことは仕方がないと思うが、行政で人口増加に向けた取組を進めてほしい。

進行役から、市部の学校の学級減を行った場合の影響について、オブザーバーである八戸工業高校長に情報提供を求めた。

- 今回の学校配置シミュレーションの（三八意見1）では、第1期実施計画期間中において重点校、地域校、平成30年度に学級減を予定している八戸商業高校以外の学校から4学級を減らすとしているが、小規模校の学級減はこれ以上できないと思う。そうすると、必然的に八戸市内の高校の内、学級数が5～7学級の学校を対象に学級減することになるかと思われる。第2期実施計画期間中も同様に八戸市内の高校を更に2学級減するのではないかと考えている。

八戸工業高校を学級減する場合は、各学科1学級ずつとなっているため、学級減がそれぞれ特色ある学科の廃止につながり、生徒の進路が狭まるおそれがある。

また、八戸市内の高校は平均すると入試倍率が1.2倍程度あり、現在1校平均40～50人がふるいにかけていると思う。八戸市内の高校の学級減を進めると更に倍率が上がり、選抜性がより高まると思うが、そうすると不合格となった生徒は、私立高校に流れるのではないかと予想される。私立高校に進学する場合は、学費等の問題が起こり、保護者に金銭面の更なる負担を強いる可能性がある。

- 田子高校が地域校の候補校になったが、なぜ田子高校なのかと思った。以前、田子高校は三戸高校の分校だった。また、新郷村には五戸高校の分校があったと記憶している。かつての分校が存続して、本校に統合の可能性があるとというのは違和感がある。どのシミュレーションも田子高校を地域校とすることを前提としているが、田子高校も含めて再編のことを考えてはどうか。

地域校について、募集人員に対する入学者の割合が2年間継続して2分の1未満となった場合、募集停止等に向けて、当該高校の所在する市町村等と協議するとあるが、協議したら田子高校を存続させてほしいという要望しか出ないのではないか。そうすると八戸市内の学校について学級減をせざるを得なくなると考えられ、田子高校を地域校とすることにより、学校配置が難しくなっているのではないか。

五戸高校がなくなると、生徒は十和田市内に流れると思う。また三戸高校がなくなると岩手県に流れると思う。五戸高校や三戸高校は地域の拠点となる学校として考えるべきではないか。

《三八意見2》

- 重点校について、現在の知識基盤社会やグローバル化の中、様々な科目を選択できるようにするためには、6学級が必要であり賛成だ。ただ、試案が示された際、重点校の取組内容の中に理数教育についても触れていたのが、八戸市内に3校ある6学級規模の学校の内、八戸北高校も重点校とすることがあり得るのでは

ないかと思い、意見を述べたところである。地区で1校ということについて異論はない。

特定の高校を重点校とした場合、学習塾の指導で高校を序列化してしまう。中学生は中1ギャップがあるなど、多感な年頃であるため、受験競争を激化させないよう配慮してほしいという意見を述べたところである。

そういうことから、前回の地区意見交換会では6学級規模ある高校については重点校の役割を果たすこととし、学級減となった場合にその役割を見直すこととしてはどうかと考え、発言したものである。また、将来各高校の進学実績も変化するだろうし、高校を受検するに当たり学区制も撤廃された中、重点校を各地区1校に固定する必要はないのではないかというのが、発言の意図であったので補足しておきたい。

進行役が重点校の考え方について事務局に説明を求めた。

→（事務局）基本方針において、「普通科等においては、各地域の実情に応じた教育活動、グローバル教育や理数教育の取組等、各高等学校において特色ある教育活動に取り組む」としており、八戸北高校を含む全ての普通科の高校で特色ある教育活動に取り組むこととしている。その中で、重点校は特色ある教育活動の中核的役割を担い、県全体の取組を牽引しながら各高校と連携し、県全体の普通科等の質の確保・向上を図ることを目的に配置するものであり、またそのような取組における各地区の取りまとめ役としての役割を担うこととなるため、各地区1校の配置として試案を公表したところである。

また、八戸高校を重点校とすることにより、高校の序列化が加速するおそれがあるとの意見があったが、重点校及び拠点校は、生徒数が大幅に減少する中であっても、充実した教育環境を整備し、本県高校教育全体の質の確保・向上を図るため、配置することとしているものであり、重点校及び拠点校の教育活動へ各高校の生徒が参加することや、指導法及び学習成果を共有することなど、各高校が連携することにより、これまで各高校が単独で取り組んできた教育活動の更なる充実を図るものである。

重点校及び拠点校は、これらの連携の推進役や取りまとめ役としての役割を担うものであり、学校の序列化ではなく、各校における教育活動の更なる充実を期待しているものである。

前回の地区意見交換会でも、6学級規模の高校については重点校の役割を果たすこととし、学級減となった場合にその役割を見直すこととしてはどうかとの意見をいただいたところであり、重点校に限らず各高校において特色ある教育活動を行っていただくことを考えている。

○ 前回の地区意見交換会では、重点校を八戸高校1校だけとすることで良いのかとの意見を出したが、（三八意見2）のように八戸高校と八戸北高校を重点校としてしまうと、八戸東高校、八戸西高校はどうかということになる。したが

って、県民が誤解しないよう、県教育委員会の方で重点校、拠点校の役割についてしっかり説明した上で、重点校や拠点校をどこにするか示した方が良い。

また、地域校については田子高校を候補校としたが、基本方針において募集人員に対する入学者の割合が2年間継続して2分の1未満となった場合、募集停止等に向けて、当該高校の所在する市町村等と協議するとしている。これは廃校を前提とした話に聞こえる。

重点校や拠点校の前に、地域校を何とかしなければならぬのではないかと。生徒がいなくなると学校がなくなるし、町自体の活性化ができなくなり悪循環になる。逆に、例えば地域校の方に有名な先生を派遣するなど、地域にいても充実した教育を受けるような方法があっても良いのではないかと。

- 重点校は、6学級、地区に1校という方針であればこれで良いと思う。

資料1を見ると、「重点校や拠点校について、差別化しているというイメージがある。」との意見や「普通科が一番上にあり、それに続いて農業科、工業科が続いているように見える。」との意見があった。確かに受け取り方によってはそのようなことも考えられると思う。

重点校・拠点校の定義については既に基本方針等で決定したものであるので異論はないが、各学科において、重点校（中心校）、地区の拠点校という考え方もあったのではないかと感じたところである。

《三八意見3》

- 八戸工業高校が拠点校の候補校となったが、専門性の高いエンジニアを育成する観点から、もっと学級数が多くても良いのではないかと。八戸市内には普通科が何校かあるが、地域で特色のある町づくりを進めている中、学校の特色化も必要なのではないかと。私は（三八意見3）に同意しているが、普通科の若干の学級減はやむを得ないと考えている。八戸水産高校は専門性が高いことから学級数を維持すべきだと思う。八戸商業高校について、学級減はやむを得ないと思う。

三戸高校、五戸高校、名久井農業高校については、将来的に子どもが減っていくため、まとまった施設、設備で子どもたちに学ばせる必要があることから、統合して新設校を設置すべきではないかと。三戸郡に1校新設校を設置すれば、複数の町村から生徒が集まり、交流を図ることができる。また、現在、地域の格差に伴う収入減による少子化、若者の流出による地域の空洞化等が生じている中、三戸郡の新設校において他の地区もうらやむような教育システムをつくり、地元で定着する人材を育てる教育を進めれば良いのではないかと。

- 意見としては（三八意見1）が無難ではないかと思う。三戸郡の新設校については、設置場所が難しいと思う。五戸町と三戸町は文化的にも異なるため、五戸高校と三戸高校の統合は難しい。さらに、五戸町から三戸高校の場所には通学しないだろうし、また、三戸町から五戸高校の場所には通学しないと思う。また、

農地の問題から統合校の場所を名久井農業高校にし、そこに普通科を設置したとしても、果たして生徒が集まるのかどうか疑問であり、現実的ではないという印象を受ける。

- 新設校をどこに設置するかという話になると、とてもまとまらないと思う。五戸町から三戸町への通学が難しい。また、名久井農業高校に統合校を設置したとしても五戸町から名久井農業高校には通いにくい。そのように考えると、五戸高校を地域校にすれば良いのではないかと思う。ただ、募集停止の基準がある。いずれにしても、新設校の設置場所は難しいと考える。

- 郡部に特色のある新設校ができれば、設置された自治体が活気づくとは思う。その場合、1高校、1校舎制にせず、複数の校舎があっても良いのではないか。通学の負担が課題であることから、1高校、1校舎制だと広域の通学には対応できないのではないか。

資料1の7ページの中南地区の意見交換会では「ある程度思い切って高校を少なくして、各学校の生徒数を増やすことが良い方向だと感じている。そうしなければ競争意識が生まれないと感じる」との意見や、同じく資料1の10ページの西北地区の意見交換会では「東青地区や中南地区の学校を減らしてでも、西北地区の学校を残して、東青地区や中南地区の子どもを西北地区の学校に進学させるという考え方をしても良いのではないか」との意見があった。

これまでは、子どもの増加に伴い高校を新設してきた経緯があった。子どもの減少に伴い高校を減らすとなると、郡部の学校に目が行くが、高校が減ると町村の文化が崩壊する。

これらのことから、高校の配置については、戦前の状況や昭和20年代の状況に戻してはどうか。例えば八戸西高校をなくすと、五戸高校に通学する生徒が増えるのではないか。かつては八戸市内から五戸高校や三戸高校に通学していたので、そのような状況に戻し、市部から町村部へ高校生が通学する流れを作り、地方創生につなげてはどうか。

進行役からオブザーバーに職業教育を主とする専門学科と普通科の統合による効果や課題について名久井農業高校長に情報提供を求めた。

- (四木校長) 農業高校は専門高校なので、普通科と学科の目標が異なる。名久井農業高校には環境システム科という工業の色彩が強い学科があるが、現在でも農と工の融合が難しい中、更に普通科が入ると行事等の運営が難しくなると考えられる。また、新設校を設置した場合、果たしてこれまで連携の実績や特徴の少ない普通科に生徒が集まるのか疑問である。徐々に農業科と近隣高校の普通科との連携に取り組んでいくのであれば良いが、いきなり複数の学科を統合しても、よほど特色ある教育に取り組まなければ難しいのではないか。

専門高校は専門高校としての立ち位置があるので、普通科と専門学科の棲み分けは必要である。

《その他》

進行役から、全体を通して意見を求めた。

○ 私としては（三八意見1）にしてほしい。先日、東北地方の市町村教育委員会教育長の会議に出たが、どこも少子化により町村が消滅の危機にあるため、小学校、中学校、高校が連携するなど、町の生き残りに寄与していく方策がないか議論した。その中で、三戸町における小学校、中学校、高校の連携の取組を紹介した。詳しい内容を三戸高校の三上校長に紹介していただきたい。

○ 三戸町の小学校、中学校、高校の連携については、平成21年度から平成22年度に県の「学習習慣形成のための校種間連携教育推進事業」として杉沢小・中学校と三戸高校との連携に取り組んだ。これを契機として、平成25年度に三戸町の小中一貫校である三戸学園の開校に合わせ、三戸高校と三戸町の小・中学校との連携を開始した。連携内容としては、児童・生徒の学力向上に関すること、児童・生徒の体力、運動能力、競技力向上に関すること、キャリア教育の充実・発展に関することなどである。

具体的には、高校生が小学生に対し夏休みの学習支援をする「寺子屋」や、部活動における合同練習、合同発表を行っている。また、キャリア教育については三戸学園6年生の立志科の授業において、高校生が自分の進路決定に関する体験の講話などを行っている。その他、機会を捉えて高校の教員が小学校、中学校の教員と情報交換を行って連携に取り組んでいる。

○ やはり学級減も含め地域から学校をなくすのは一筋縄ではいかないと感じた。ここで大事なのは、県がなぜ次期計画に向けて取組を進めているかということである。平成30年度からの10年間で中学校卒業生数が約3,100人減少する中、今の高校の数では教育環境が維持できない、教育の質を担保できないという危機感から来ているものと考えている。

私も在任中に小・中学校を4校統合している。統合に当たっては、20数回会議をした。10回目辺りの会議から、「何のために統合が必要なのか」という趣旨を地域住民の方によく理解していただき、これから良い環境の中で子どもたちに学ばせるためにはどうすれば良いかという意見を最終的にいただいた。

今日の話聞いていて、そのことを思い起こしていた。再編や統廃合に関しては、自分の地域にこだわると先に進まなくなってしまう。（三八意見1）にあるように、均等に身を切りましょう（各地域から均等に学級を減らしましょう）ということが良いのか。（三八意見1）のシミュレーションから、ここ数年のことではなく、これから未来を生きていく子どもたちの「高校教育の質」を本当に担

保できるのかということを考える必要がある。今回の地区意見交換会の最初に何学級あれば各科目において専門教員を配置できるのかについて4学級との意見をいただいた。教員配置は自由にできるわけではないので、学級数は非常に大事だと思う。

ただ、私は郡部の学校と同様、八戸市内の高校も学級減するというのは覚悟して臨んでいる。

また、青森県立高等学校将来構想検討会議委員として田子高校を視察した際、田子高校の教務主任から、田子高校がなくなれば高校に行けない子がいるとの発言があった。田子高校があるおかげで高校に通える生徒がいる、つまり経済的な格差が教育の格差を生んでいると感じた。しかし、現実として資料2を見ると、田子中学校の生徒にも高校選択の自由があるため、田子高校に多くの生徒が入学しているわけではない状況もある。

オール青森という視点と、我が地域という視点があるが、自分の地域から学校がなくなるということを含め、青森県の未来を担う子どもたちのために身を切る、つまり、再編に向けて学級減・統廃合に応じるという思いがないと、ソフトランディングできないのではないかと考えている。

- 名久井農業高校は南部町との連携が密である。また、名久井農業高校は生徒の力を伸ばす非常に良い取組をしている高校である。

そのようなことを考えた場合、確かに、学級数は大切であるが、高校に行きたくても通学が難しい生徒もいる。南部町は幸い交通の便が良いので八戸市内の高校を含め選択肢があるが、他の町村を考えると、通学環境の点から現実的には（三八意見1）が良いと考える。

どの町村でも人口減少、後継者問題、地元の雇用については非常に大きな問題として抱えており、それを打破するには教育の力が絶対に必要である。

また、重点校、拠点校の趣旨について保護者を含めた県民にしっかり説明し、誤解を生まないようにすべきである。

大変難しい問題であるが、何十年先の高校教育を考えると、今回の会議は非常に大事だと思う。

進行役から定時制課程・通信制課程について意見を求めたが、特に意見はなかった。

進行役から、次回の第3回地区意見交換会の開催前に、各委員に対して、これまでの意見交換会における意見等を項目ごとに整理し、当地区の主な意見を整理案として送付するよう指示があった。

その上で整理案について事前に各委員から意見を提出し、第3回地区意見交換会に資することとしたい旨の発言があった。

5 閉会